

デイビッド・ドリスケルの参加のモデルに基づく 「平尾クリーン大作戦」の分析と考察

太 町 智

(愛知県豊川市立平尾小学校)

A Study of “HIRAO Cleen Project” based on D. Driskell's Participation Model

Satoshi OHMACHI

(Hirao Elementary School, Toyokawa, Aichi)

I はじめに

平成14年度から総合的な学習の時間が全面実施され、従来の教科の学習だけでは身に付けることが難しい技術や技能を、学校教育の中で習得できる機会が増加している。それにともない、教育活動も、学校という小さな枠を飛び出してダイナミックに展開されるようになった。これは肯定的な変化といえるだろう。

しかしながら、デイビッド・ドリスケル(David Driskell)は、「市民参加、特に子どもの参加は、しばしば誤解される傾向にあり、実際に多く見られる参加については、見当違いであったり、不適当な方法で適用されていたり、もしくは大人によってコントロールされていたり、地域社会の利益に反した目的のために操られたりしている」¹⁾と述べている。

これまで、学校教育において、地域社会との関わりについて議論されることはほとんどなかった。日本では、学校と地域社会との接点は少なかったが、それぞれが子どもたちの教育を分担しており、相互に補完し合いながらバランスを取ってきた。子どもたちは、自然に過程や地域の一員としての役割を、半ば強制的にでも担うことになっていた。

しかし、近年、家庭や地域の教育の崩壊が叫ばれているように、これまでのバランスが大きく崩れている中、子どもたちが地域社会に参加する機会を、学校が生み出す必要が出てきた。これまで検討する必要のなかったことだけに、参加の定義すら十分検討されずに、ただ闇雲に地域のことについて学習するだけの例も多いだろう。

「地域社会への子どもの参加についての研究」²⁾では、子どもの参加の条件や質的な定義について論じた²⁾。本小論では、米国において、若者や子ども

とともによりよい町づくりに関わっているドリスケルの参加の理論を足がかりに、実践事例に基づいて、子どもたちの地域社会への参加のあり方について検討したい。

II 子どものよる参加の意義

特に開発途上国では、子どもや若者がパートナーとして地域社会の開発に参加する例は増えている。また、先進国においても、学校が中心となって、子どもたちを地域社会の開発に参加させることもしばしば見られるようになった。しかし、日本においては、子どもが地域社会の開発に参加する例は少ない。学校での取り組みも同様であり、地域との関わりが重視されているものの、子どもたちが意見を求められたり、子どもたちが中心になってプロジェクトを動かすような取り組みは稀である。

このような問題は、子どもの参加の価値が限定的に捉えられていることに起因する。ロジャー・ハート(Roger A. Hart)は、「社会発展への最も信頼できるアプローチは、環境の管理について理解と関心を持ち、民主的なコミュニティづくりに積極的に参加し活動する市民を育てることである」³⁾と提唱するとともに、子どもの参加力に注目し、「子どもたちは、直接参加することを通してはじめて、民主主義についての本当に正しい認識や、彼ら自身のコンピテンスや参加することへの責任の感覚を発達させることができるようになる。物質的な環境を計画したり、デザインしたり、監視したり、管理したりすることは、子どもの参加を実践する理想的な分野である」⁴⁾と述べ、子どもが直接地域に参加し、関わることで、子ども自身が成長し、それが将来の社会全体の発展につながる可能性について触れている。

このように、子どもが地域社会の開発に参加することは、当然ながら子ども自身にとって大きな価値を持っている。しかし、このような参加による価値は、子どもたちだけにあるのではない。ドリスケルは、子どもが地域社会の開発に参加することによる潜在的な利益について、「民主主義や寛容について学ぶことができる」「地域社会の模範となる役割を果たす人々と人的資源となる人々を含む新しい中間のネットワークを展開することができる」「環境を管理するという感覚や、市民的な責任の感覚を発達させることができる」「自分たちが設定した目標を達成する能力についての自信を発達させることができる」等、子どもたちにとっての利益を挙げるとともに、地域社会にとっては、「肯定的、建設的な方法で子どもたちと関わり合い、世代間にしばしば存在する誤解や不信を克服するのに役立つ」「政策や開発の意思決定に本来備わっている複雑さ、それに関わる矛盾について地域社会の構成員を教育することができる」「より子どもが親しみやすく思いやりのある都市環境を創り出すことができる」等の利益を例示している。⁵⁾

これらの利益があるにもかかわらず、「子どもに責任を負わせることができるのか」「子どもは知識や経験、技能が不足しているので、参加できないのではないか」「子どもを甘やかすことになるのではないか」といった、子どもの参加を認めようとする意見も根強くあるのが現状である。

子どもや若者がパートナーとして地域社会の開発の過程に参加する目的は、彼らが生活している場の質的な向上を図るだけでなく、彼らの生活の質そのものを向上させることである。そして、ドリスケルが「若者にとって良い場所は、全ての人にとって良い」⁶⁾と述べているように、彼らの生活の質を向上させることは、地域社会全体の質の向上につながるものである。しかし、このような考え方は全ての大人に広がっているわけではない。これは、地域社会の開発に参加する機会のない大人が多く、この過程に関わることの重要性についての認識が低いことに原因があるのではないだろうか。

ドリスケルは、「若者は、現在および将来の地域社会の価値ある構成員である。子どもは、あらゆる場所の都市人口の、大部分ではないにしても重要な

一部であるといえる。というのも、彼らの決定や行為は、短期的な影響だけでなく、長期的な影響を与えるからである。また、彼らは、この先長く、地域社会において重要な能動者となるだろう。彼らの知識、技能および社会的責任の発達のための投資は、我々の将来の生活をよりよくするための最も良い投資である」⁷⁾と指摘している。子どもが地域社会に参加する必要性や意義についての大人の理解を得ること、そして、子どもの参加に対する大人の意識や態度を変えていくことが不可欠である。

Ⅲ 子どもの参加の条件

子どもが価値のあるパートナーとして扱われ、意思決定が共有されることは、最高のレベルの参加の形である。そして、どのようにしてこのような参加を現実のものにするか、ということが重要な問題である。

ドリスケルは、有意義な参加のための必要条件として、以下の項目を挙げている。⁸⁾

- 地域性(Local)
- 透明性(Transparent)
- 包括性(Inclusive)
- 双方向性(Interactive)
- 応答性(Responsive)
- 適切性(Relevant)
- 教育性(Educational)
- 反省性(Reflective)
- 可変性(Transformative)
- 持続性(Sustainable)
- 個別性(Personal)
- 自発性(Voluntary)

参加のプロジェクトを計画するにあたっては、これらの条件を満たすようにする必要がある。今回の取り組みでは、それぞれの条件について、次のように考えた。

地域性 よりローカルな地域のニーズや問題点を子どもたちが理解することで、実質的な参加の機会を生み出すとともに、地域への思いや愛着を深められるようにする。

透明性 地域のニーズや問題の確認に子どもたちが

直接関わる。活動の目標の設定や実施、評価等を自分たちで行う。また、話し合いの場として、「作戦会議」を設け、これらを子どもたちの間で共有できるようにする。

包括性 子どもたちだけでなく、学校全体、さらには地域の人々を巻き込み、一緒に活動する機会を設ける。

双方向性 やりっぱなしの活動ではなく、地域社会との対話を通して、様々な人々から評価が得られるようにする。

応答性 教師は、子どもたちが取り組むそれぞれの活動に対して、目標や支援等のビジョンを持つ必要がある。しかし、これを絶対的なものとするのではなく、子どもたちの思いや願いが達成されることを優先に、個々のグループに対して支援する。

適切性 それぞれの分野の専門家の意見を聞く場や、インターネットや文献による調べ学習の場、インタビューをしたりアンケートを取ったりする場を保障し、子どもたちにとって必要で有益な情報が得られるようにする。

教育性 話し合いやグループごとの活動を計画、実行を通して、民主的に意思決定をする能力や、問題を解決する能力を身に付けさせる。

反省性 全員で、活動について振り返る場を確保し、その反省を次の活動に生かせるようにする。その際、外部の声も聞けるようにする。

可変性 活動を通して、子どもたちの意識や生活の変化だけでなく、地域との関わりの中で、地域社会の意識の変化を図る。

持続性 強い問題意識を持たせることで、子どもたちに確かな思いや願いを持たせ、授業を枠を超えて持続的に地域社会に参加できるようにする。

個別性 問題に対する意識は個々の子どもたちで異なる。活動ごとのワークシートの記録の分析や対話を通して、彼らの思いや願いを十分に生かせるようにする。

自発性 子どもたちの関心事について、グループごとに活動を計画し、取り組ませる。また、確かな問題意識が生まれるように、問題を確認する機会を保障するとともに、問題をより身近に感じられるような環境整備を行うことで、自発的な活動を促す。

IV 研究実践「平尾クリーン大作戦」

本校は、校区に山や川を持つ、多くの自然に囲まれている、全校児童200名余りの小規模校である。一方で、次々に新たな住宅が建築されており、校区に移り住む住民は年々増加している。そのためか、地域社会に対する意識は決して高いとはいえないのが現状である。

本校の4年生の子どもたち(男子18名、女子24名)の多くは、生まれたときから同じ地域で生活してきたものの、これまで、地域の人々と一緒に活動したり、地域のために何か貢献したりすることはほとんどなかった。すなわち、本当の意味で地域社会に市民として参加する機会がなかったということである。そのため、子どもの参加に対する地域社会の期待も決して大きくないといえる。このような状況は、本校に限ったことではなく、今や全国的な傾向だと考えている。そこで、学校を出発点として、地域社会に参加しながら、家庭や地域を巻き込んで、協働して平尾のごみ問題に取り組む「平尾クリーン大作戦」

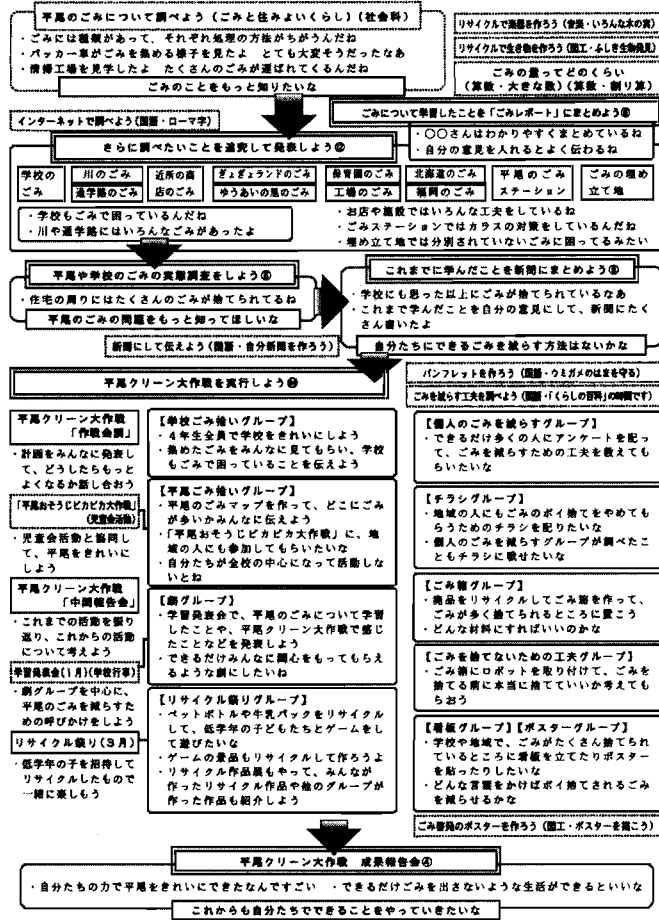


図1 単元構想 (80時間完了)

戦」を、本研究で取り組むプロジェクトに設定した。単元構想は図1の通りである。

(1) 実践のスタート「ごみとの出会い」

校区では、分別されずに出されるごみ、川や道路に捨てられるごみなど、ごみを捨てる市民のモラルが問題になっている。地域のごみステーションには監視員が立つようになり、地域のごみ問題はもはや看過できない状況である。通学路にも多くのごみが捨てられているが、これまで、本校において、こうした校区のごみ問題に取り組んだことはない。子どもたちは、通学路にごみが捨てられていることに気付いてはいても、ほとんど関心を持っていない。また、校区には、市内の可燃ごみが全て集められ燃やされる清掃工場があり、また、近隣には不燃ごみの埋め立て地もあるが、子どもたちはこれらの施設について全く知らない。ごみについて関心を持たせることと同時に、ごみが子どもたちの生活とどのように関係しているのか、身近なごみ問題に向かい合うことで、地域社会への関心が生まれると考え、「平尾クリーン大作戦」を始動させた。

当初、ほとんどの子どもたちが、「汚い」「臭い」と、ごみに関わる学習に消極的な態度を覗かせていた。そんな子どもたちも、ごみステーションで収集の様子や清掃工場で可燃ごみが燃やされる様子を見学したり、実際にパッカー車にごみを積む体験をしたりするうちに、「近所の川がどれだけ汚れているか調べてみたい」「近所の施設や商店ではどんなごみを減らすための工夫をしているのかな」など、ごみに対して強い関心を示すようになった。特に、不燃ごみの最終処分場を見学し、既に満杯になっている様子を見た子どもたちからは、「ごみを減らす努

力をしないといけない」「リサイクルできるものはリサイクルしよう」といった声が聞かれた。児童Aは、図2のように、処分場で働く人の立場に立った感想を残している。

問題を継続的に追究させるためには、子どもたちに課題に対する強い切実感や問題意識を持たせるとともに、それを持続させることが重要だと考え、教室の脇に、家庭や学校から出されるごみを入れるごみステーションを設置し、意識付けを図った。子どもたちは、最初はなんとなく分別していたが、清掃工場やリサイクル施設で働く人の苦勞を知り、ごみが正しく捨てられているかどうか、壁面に貼られた分別の一覧表を見て確認するようになった。また、誰に言われることもなく、これまでそのまま置かれていたペットボトルのキャップやラベルを外し、整理して並べる子どもたちの姿が見られた。



子どもたちが自分の手で分別する教室のごみステーション

(2) 問題の確認「平尾のごみの実態調査」

子どもたちの関心が高まったところで、個々で今後さらに追究したいテーマを決め、本単元を始動させた。子どもたちは、夏休みも利用し、個々の課題を追究していった。近所のスーパーや駄菓子屋などから実際にどれだけのごみが出されるのか調査したり、保育園や高齢者介護施設、娯楽施設などを訪問し、ごみを減らすためにどのような工夫をしているかインタビューしたりした。これらの活動を通して、子どもたちは、地域の様々な人たちと関わった。国語の学習で、インタビューの仕方やアポイントメントの取り方などを練習するが、知らない人相手にいざやってみると、なかなか上手にできない。このようなコミュニケーションが日常的に行われる機会がほとんどないということが明らかになった。その後

わたしは、ペットボトルのキャップもいれたいし、
紙と、おいらんたすか、とりのぞか
たれいもいれたいの。で、みんなたち
とわけてほしいと思ひました。
ペットボトルとか、まなごころに
いれと、リサイクルできるとい
おん、ちゃんとしてほしいと思
ひました。それに、おいらんたすか
しごとがあるのに、わかりやすくせつめ
いしてくたしました。これから、
わたしも、しごとをまわります。
いでも、おいらんたすか、しごと
らしくなったらいいと思ひました。

図2 処分場見学後の児童Aの感想

の活動では、リサイクル祭りを開いて小さな子を招待したり、ポスターを貼らせてもらうために地域の商店や施設にお願いに行ったりと、多様な人々と関わるようになった。

通学路のごみについて調べた児童Aは、ごみの種類や量について実際に歩いて調べ、落ちていた場所やごみの種類と量を地図上にまとめ発表した。意外にごみがたくさん落ちていることに気付いた児童Aは、「今まで、毎日学校に来るとき通学路を通っていたのに、こんなにごみがあるなんて知らなかった」と、感想を残した。

学校のごみについてさらに追究したグループは、学校でごみに関わりのある何人かの職員に、ごみで困っていることをインタビューして発表した。紙くずがリサイクルされずに燃えるごみに入れられていることや月曜日になると校庭に菓子の袋などのごみがたくさん捨てられること等を知り、発表の中で改善を呼びかけた。

これらの追究活動を通して、子どもたちは、ごみを減らすための取り組みが様々なところで実施されている一方で、増え続けるごみが深刻な問題を引き起こしているという現実、学校や地域に多くのごみが捨てられているという現実と直面することになった。発表終了後、児童Aは、「自分たちの生活を見直したり、地域の人々と一緒に平尾を掃除したり、ごみをできるだけ出さないように地域に呼びかけたりして、平尾をごみのないきれいな町にしたい」と、今後の取り組みに強い意欲を覗かせた。

(3) 変革のための計画「作戦会議」

今後自分たちが取り組んでいきたい活動について学年全員で話し合った。そして、自分が取り組みたい活動ごとにグループに分かれ、それぞれの平尾クリーン大作戦を計画し、実行に移すことにした。計画には様々なものがある。ごみ減量と呼びかける看板を立てたりポスターを貼ったりするグループもあれば、地域に呼びかけるグループもある。

10月、それぞれのグループが考えた作戦について、みんなで話し合う、「作戦会議」の場を設けた。発表する子どもたちは、作戦の内容についてアドバイスを求めたり、作戦への協力を求めたりする。この活動で重要なことは、計画を発表する子どもたちが、

あくまで「計画立案者」に過ぎないということである。計画を実行するのは、自分たちだけでなく、他のグループや全校の子ども、あるいは地域の人々などである。会議の中では、その作戦は本当に実現できるのか、実行する意味はあるのかといった議論が行われ、承諾が得られなければ計画を練り直して再提案しなければならない。作戦会議には、作戦に関わる多くの人々が参加した。子どもたちは、計画を修正しながら、それぞれの計画を実行に移していった。この活動を通して、子どもたちは、計画に強い責任意識を持つだけでなく、児童Aが図3に示す感想を残しているように、地域への思いや愛着を深めていった。

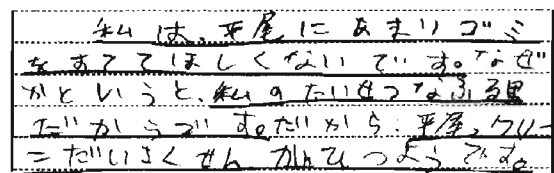


図3 活動後の児童Aの感想

以下では、グループの一つ、「平尾ごみ拾いグループ」の計画やその活動について紹介したい。

(4) 行動を起こす「平尾ピカピカ大作戦」

平尾ごみ拾いグループは、地域全体のごみ拾いを計画した。そのためには、学校全体を動かしていく必要があった。校長先生の許可をもらい、日程も決めた子どもたちであったが、作戦会議では、「どうやって全校に呼びかけるの」「どうせやるなら地域の人にも一緒にやってもらった方がいい」等の意見が多く、5・6年生と話し合い、一緒に計画を進めていくことになった。こうして、児童会活動「平尾ピカピカ大作戦」が始動した。

全校に清掃活動の必要性を訴え、作戦への参加を呼びかけた。計画では、1年生から6年生までの縦



平尾ピカピカ大作戦で集められた大量のごみ

割りグループごとにごみの多かった場所の清掃活動を行い、翌朝、通学路のごみを拾いながら登校し、学校でごみを回収する。

この計画では、準備が間に合わず、地域の人々にまで参加を呼びかけることはできなかったが、地域の今回の取り組みへの関心は高く、子どもたちの姿を見た人々からは、「子どもたちが一生懸命ごみを拾ってくれてうれしい」「次があれば一緒に参加したい」といった声が聞かれた。活動後、「私は、ごみは汚くてさわりたくないと思っていました。でも、（中略）4年生だけで平尾保育園の周りや市営住宅の周りをきれいにしたとき、平尾がピカピカになってとてもうれしかったです。（中略）全校で平尾ピカピカ大作戦をやると聞いて、すごくうれしかったです。パート1、パート2とあったけど、自分の家の周りもやってみようと思います。」と児童Aは感想を残した（図4）。児童Aの感想からは、十分な満足感や達成感が窺える。

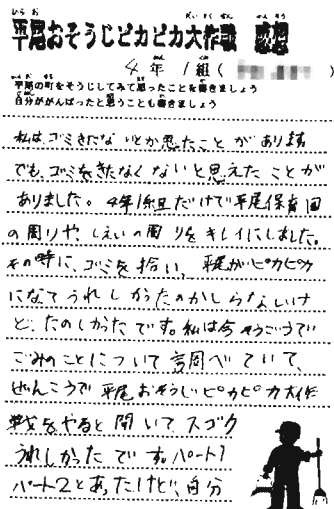


図4 活動後の児童Aの感想

V 実践事例の分析

参加の条件の達成状況を示したものが図5である。それぞれの条件の達成の度合いについて、十分に達成できたレベル3から、不十分なレベル1までの3段階で模式的に表した。

環境問題を取り扱う活動では、しばしばよりグローバルな内容（地球温暖化や大気汚染等）が取り上げられることがある。それらの内容はもちろん重要である。しかし、ローカルな問題に目を向けることなく、グローバルな視野を持つということは到底不可能である。今回は、問題の確認から計画の実行

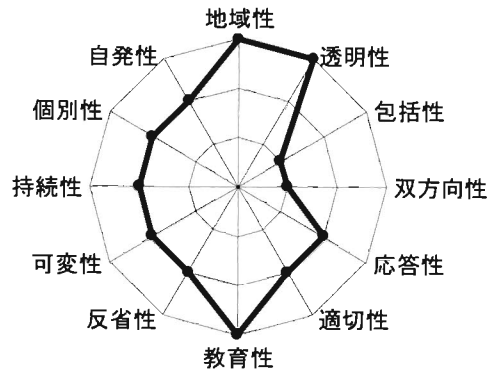


図5 有意義な参加の必要条件のレーダーチャート

という過程を通して、地域の人々へのインタビューや、地域の清掃活動等、子どもたちは地域に密着した活動を行ってきた。そして、その中で、地域への思いや愛着を深めることができた（地域性）。

また、子どもたちは、自分たちなりの目的意識を持って、最後まで活動に取り組むことができた。目的を全員で共有する場面も、作戦会議によって保証されたと考えられる（透明性）。

そして、計画立案から実行へのプロセスを通して、問題解決のための手段や、民主的な意思決定について学び、子どもたちの手で全校を動かして活動できた点は大きな成果である（教育性）。

一方、問題点としては、地域の人と共に活動する場面を生み出せず、包括性が保証されなかったことがある。そして、そのために、活動が一方通行になってしまい、双方向性を保証することができなかった（包括性・双方向性）。作戦会議を通して、子どもたちは、実践した計画を振り返り、新たな計画を立てることができた。そこに、外部の声が入ることで、より有効に機能したと考えられる（反省性）。

子どもたちは、問題の確認に関わって、行政の担当者に質問したり、インターネットで調べたりした。主な情報源の一つであるインターネットは、情報の不確かさや、子どもたちにとって難解な表現の多さなどから、適切であったとはいえなかった。行政の担当者や専門家等と関わる機会を増やすことで、適切性を保証することができたであろう（適切性）。

地域の意識を変革することが、今回の取り組みの大きな目標であった。これは簡単に変えることはできないが、平尾ピカピカ大作戦を終えたあとの地域の声からも、地域の意識を変える布石を打つことができたと考えている。少なくとも、児童Aの感想か

らもわかるように、子どもたちの意識は大きく変わっている（可変性）。今回の取り組みがきっかけとなり、「平尾ピカピカ大作戦」は、学校行事の中に位置付けられ、定期的に行われるようになった。これは肯定的な変化であるが、今後は、学校行事としてではなく、地域と協働しながら、地域や子どもたちの自主的な活動として取り込まれるようにしていくことが肝要である（持続性・自発性）。

さて、ドリスケルは、子どもの地域社会への参加の質について、図6のようにモデル化して説明している⁹⁾。少々長くなるが、参加の質を高める重要な示唆を与えるものだと考えられるので紹介したい。

このモデルでは、「意思決定の能力と地域社会の変化に影響を与える能力」と「地域社会の人々との相互作用や協働」の2つの次元に基づいて、「意思決定を共有する参加」や「子どもが責任を負う参加」を質の高い参加と位置付け、いわゆる「参加とは呼べない参加（＝非参加）」と、本物の参加とを明確に分けている。「子どもが責任を負う参加」および「意思決定を共有する参加」について、ドリスケルは次のように説明している。

「子どもが責任を負う参加」は、子どもが活動を始め、意思決定し、彼ら自身でその成果を判断する参加である。地域社会の他のグループとの相互作用のレベルは決して高くないが、与えられる意思決定のレベルは高いといえる。地域社会の変化に影響を与える能力は、良いコネクションのある大人からの支援や援助がないために制限される可能性がある。このような参加は、民主的な意思決定が行われる点や、仲間と自分自身の生活を変えるために協力し合うという点において、子どもに大きな影響を与える経験となり得る。この段階の参加の例には、空き地にクラブハウスを建てる活動などがある。

「意思決定を共有する参加」は、年齢やバックグラウンドに関係なく、地域社会のあらゆる構成員が、地域社会の変化の過程に関わる機会を持っており、また、意思決定において平等に発言する権利が与えられている参加である。子どもと大人、どちらにもよって始められるかに関わらず、プロジェクトを開始するグループは、協働することの価値を実感しており、計画立案や意思決定の過程の全体に渡って地域社会の他の構成員の参加を求める。大人は、地域社会の変化の過程における自分の役割や立場につい

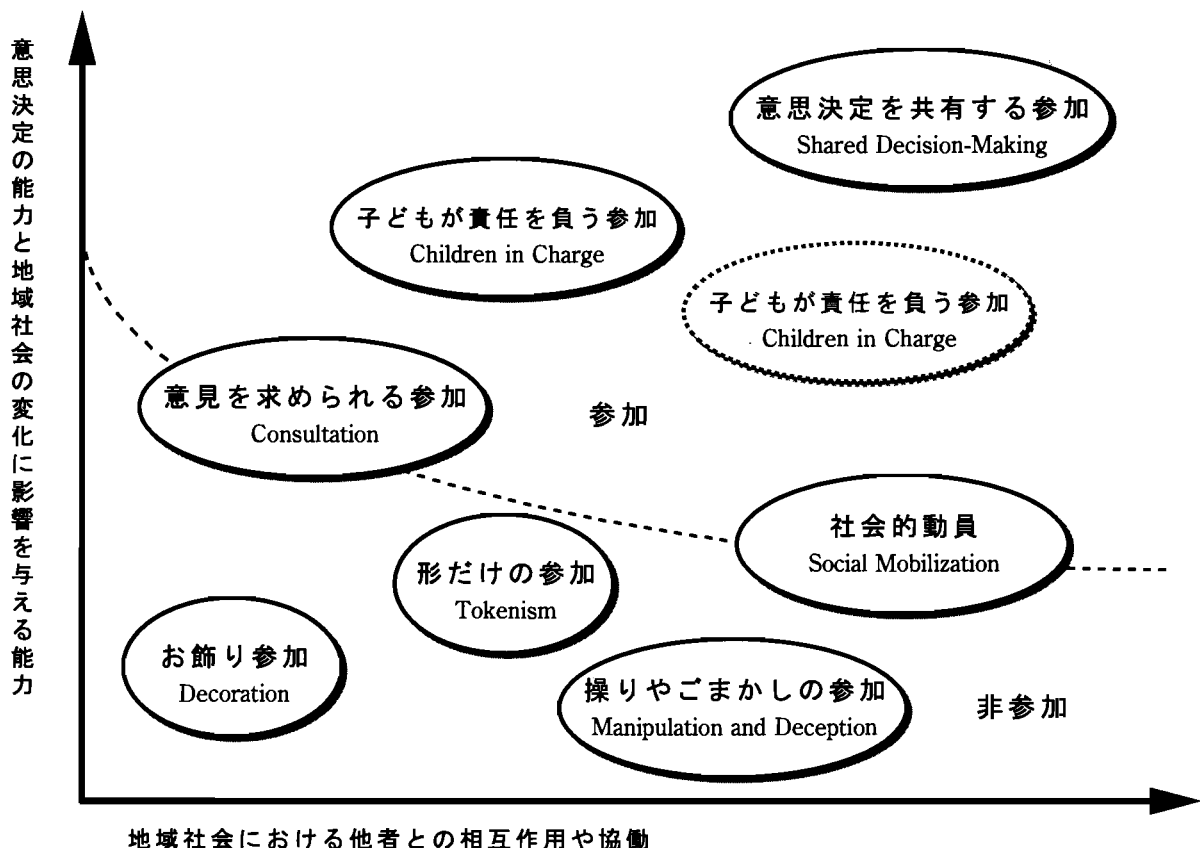


図6 ドリスケルの参加のモデル

て鋭敏であり、子どもや若者の見解や意見、洞察に注意深く、さらに、大人が議論を支配したり、大人の目的のために議論を操ることのないよう保証する。これらのプロジェクトは、全ての居住者のニーズに応える、より活気に満ちた民主主義やコミュニティをつくり出すために不可欠な基本的要素である。¹⁰⁾

このモデルで注目すべきことは、子どもたちにプロジェクトに対して責任を負わせることができるかどうか、参加の質を高める上での大きなカギである。「子どもが責任を負う参加」は、良いコンネクションのある大人からの支援や援助が得られるのであれば、すなわち、地域社会における他者との相互作用や協働が増大するのであれば、この参加は図2に点線の枠で示したように、参加の質は大きく変わってくる。地域社会との密接な関わりが要求されるこの過程は、「意思決定を共有する参加」を実現するための重要な段階である。そして、質の高い参加を可能にするのは、子ども自身の能力もさることながら、地域社会の人々との相互作用や協働である。

今回の取り組みは、初期の段階では、参加とは呼べない参加に止まっているが、作戦会議を通して、子どもたちは自分の活動に責任を持って取り組むことができるようになった。平尾ピカピカ大作戦での参加の形は、子どもたちが責任を持って計画し、他者を巻き込んで行動している。これは、社会的動員としてごみ拾いをするだけの活動とは全く異なるものである。一方で、地域の人々を巻き込む部分が不十分であり、意思決定を共有するまでには至っていない。子どもたち自身の参加のスキルを高めていくと同時に、人的にも物質的にも環境整備を進め、地域を巻き込んでいく必要があるだろう。

参加の条件の達成基準の明確化や、地域との協働のあり方については、今後さらに検討していきたい。

VI おわりに

今回の総合的な学習の時間の取り組みに対する満足度調査では、大変満足と答えた子どもはおよそ8割であり、ほぼ満足を加えると9割に達した。その理由として、「学校を出て活動できたのが良かった」「実際にごみが減ってすごうれしかった」等が挙

げられた。

今、子どもたちは、地域社会への参加の入り口に立つことができた。これは大きな進歩である。ハートは、「グローバルに考え、ローカルに行動せよ。(Think Globally, Act Locally.)」という1970年代の格言を不十分であるとし、「ローカルにもグローバルにも考え、行動せよ」と述べている¹¹⁾。今後は、さらにグローバルな活動が求められる。しかし、地域社会に根ざした参加こそが、将来的に地球規模で行動できる市民を育てる土台である。本質的に地域社会に参加した子どもたちが、引き続きそれぞれの地域社会の形成者として、継続的、永続的にその地域社会に貢献していくことを期待している。

【注】

- 1) David Driskell, *Creating Better Cities with Children and Youth*, UK: Earthscan Publications, 2002, p. 32
- 2) 中野真志・太町智「地域社会への子どもの参加についての研究」愛知教育大学実践総合センター紀要, 2004年
- 3) Roger A. Hart, *Children's Participation: The Theory and Practice of Involving Young Citizens in Community development and Environmental Care.*, UK: Earthscan Publications, 1997, p. 3
- 4) *Ibid.*, p. 3
- 5) David Driskell, *op.cit.*, p. 35 (筆者による抜粋)
このことに関しては、以下の先行研究を参照されたい。
中野真志・秋吉知久「中学校における地域社会に根ざした総合的な学習—生徒による地域への社会参加をめざして—」生活科・総合的学習研究第1号, 2003年
- 6) *Ibid.*, p. 24
- 7) *Ibid.*, p. 22
- 8) *Ibid.*, pp. 32-34
それぞれの詳細については、中野真志・太町智, 前掲書2) pp. 2-3 を参照されたい。
- 9) *Ibid.*, p. 40 (点線枠の参加は筆者による)
- 10) *Ibid.*, p. 42
- 11) Roger A. Hart, *op.cit.*, p. 194